優 秀 賞　北海道ＰＴＡ連合会長賞

どんな人でも

根室地区　中標津町立広陵中学校　２年　楓川　奈央

二〇一六年七月二十六日、何があったか覚えていますか？この日は、神奈川県相模原市津久井やまゆり園で殺傷事件があった日です。この事件で亡くなった人は十九名、ケガをした人は四十名以上もおり、「戦後最大の事件」と言われています。この事件を知ったとき、私は犯人に対し大きな怒りを覚え、被害者のことを思うと、とても悲しくなりました。

しかし、犯人のある言葉で、全てがショックに変わりました。その言葉とは、犯人の動機でした。

「障害者なんて、いなくなればいいと思った。」

みなさんはこの言葉、どう思いますか？障害者を雇う会社も増えている今、このような言葉を発する人がいるとは、私は夢にも思いませんでした。それと同時に「私の耳は、どう思われているのか」と思いました。

私は難聴です。去年の十二月、手術により左耳はほぼ平常まで回復しましたが、今でもテレビを見る時は両耳にこの補聴器をつけないと、聴こえません。

去年、中学校へあがる時、

「先生の声は聞こえるか」

「耳のことで何か悪口を言われないか」

と心配でした。ですが、先生の声はよく聞こえ、耳について悪口を言われたことは、一度もありません。本当に良かったと思っています。

私は、社会で働く難聴者、ろうあ者はどのような悩みを持っているのか疑問を持ち、「ＮＨＫハートネット」の書き込み板を見ました。すると、そこには多くの意見や悩みが書かれていました。その中で私が特に共感した悩みが二つあります。

一つ目は、「聞き返すことに躊躇し、よく分からずに返事をしてしまう」ことについてです。これは私も何度も経験があります。そこで私は友達の問いが聞き取れなかったら、今までの会話や、やっていたことから推測して答えたりしています。これは、もし聞き返したら「聞いていない」と思われたり、「いやな顔をされたりするかもしれない」という思いがあるからです。

二つ目は、「すれ違う人と挨拶をしたら、自分の声が向こうに聞こえず無視したと思われた」という悩みでした。今は自分の声がどこまで届くかわかっているのでこのようなことはありません。でも、手術する前は私も誰かと挨拶するだけでドキドキして、「声、聞こえたかな」と心配でした。

世の中では、相模原の事件の犯人に共感した、という人もいるそうです。たしかに、高齢化が進んでいる今、介護の手も足りなくなっています。だからと言って、自分で意思表示ができないから…一人で生きていくことができないから…そんな理由で、突きはなしてもいいことなのでしょうか？

私は違うと思います。

「齢」、つまり「齢を重ねる」とは「弱いを重ねる」こと。これは、社会学者である上野千鶴子さんの言葉です。その意味は年をとれば誰でも働けなくなり、生活をするには他人の手が必要となる、ということです。だからこそ、いつかは弱者になる私たちも、安心して生きていける、社会をつくることが必要なのです。この上野さんの言葉に私は共感しました。

先ほど紹介した書き込み板では、「もっと難聴について知ってほしい」という意見が多かったです。彼らは、優しくされることや手助けされることだけを、望んでいるわけではありません。この障害をもって、何が大変で何ができないのか、正しい理解を求めているのです。

みなさんも、いつか大人になったら障害を持つ人と働くかもしれません。でも、どんな時でも忘れないで下さい。大人も、子供も、しゃべることのできない人も、歩けない老人も、どんな人でも、「みんなが同じ重さの命を持っている」ということを。